

第6章 組織的・計画的・継続的な道徳指導

=道徳教育にかかる諸計画の立案、活用について研修します

2 別葉の意義とそのねらい

(1) 別葉とは

本講座の内容は学図情報誌「道徳通信」第3号をベースにしています。(注1)

別葉って何？多くの先生方はこの用語すら縁遠いでしょう。実際、Uchidaは「別葉って何ですか」と訊かれて一瞬思考が止まったことがあります。そのうちに尋ねられていることが「別葉」のことかと理解でき、別葉の葉とは紙のこと、別紙と同じですと答えたことがありました。(これは正確には誤り。別頁。後述)

別葉が登場したのは前指導要領。この時、初めて「要」ということばが指導要領上に用いられて(注2)、道徳の時間は学校教育全体の要に位置付けました。前回研修したように、要になったことにより全体計画を初めとする諸計画の充実が叫ばれ、各校の道徳教育全体計画は一変したのです。この全体計画の充実に合わせて「別葉」作成の要が述べられているのですが、この時は全体計画等諸計画の整備充実が優先されて、別葉は余り話題に上りませんでした。

別葉とは何でしょう。そしてその作成のねらいは何でしょう。

前指導要領解説道徳編には「全体計画を一覧表にして示す場合は、必要な各事項について文章化したり、具体化したりしたものを加えるなどの工夫が望まれる。」とあって、「①各教科等における道徳教育にかかわる指導の内容及び時期を整理したもの、②道徳教育にかかわる体験活動や実践活動の時期等が一覧できるもの、③道徳教育の推進体制や家庭や地域社会等との連携のための活動等が分かるもの」が例示され「別葉にして加えるなどして、年間を通して具体的に活用しやすいものとすること」とありました。

さらに平成26年8月の道徳教育専門部会配付資料の中で「『道徳教育の全体計画』の実質化を図るためには、別葉において、重点目標に

ついて道徳の時間と各教科等との関連が一目でわかるようにし、全教職員で共通理解を図って実際に全体計画を活用できるようにすることが必要。」ともありました。

要は、全体計画の実質化で、全体計画が諸計画を包括し、活用されて**実効化**(注3)されることを狙っていると解すればいいでしょう。

かつて、グランドデザインを美術の先生に描かせたという、笑えないような話がありましたが、道徳教育全体計画も「道徳教育全体計画」という「図表」を作成しても何の意味もありません。計画は目標→計画→指導(学習活動)→評価という一連の中で生きて働かなければ作成する意義がないのです。全体計画は、以下の諸計画を包含することになるので、道徳教育における最も重要な計画です。その計画が諸計画や実践と結びついて実効化する、そのジョイント役を別葉が演じるのです。

教科書編集では	内容項目の精査(要素) 内容項目(指導内容)と教材との関係を明確にする(教材編集)
各学校では	子どもたちの道徳性の実態や、全教育活動と関連付け、どの時期どのような内容項目を指導するかを位置づけ、共有。
内容項目での計画	
道徳教育と道徳科との関係の明確化	
道徳教育全体計画	学校教育目標実現を図る重要計画
別葉	「道徳教育の全体計画」の実質化を図るためには、別葉において、 <u>重点目標について道徳の時間と各教科等との関連が一目でわかるようにし、全教職員で共通理解を図って実際に全体計画を活用できるようにすることが必要。</u> (2018) 道徳教育専門部会配付資料)
原簿は、道徳における総合単元学習 2 押谷由夫先生指導	この教材の内容項目との関連、教材編集の意図を指導書等で明確化。計画化するのは、各学校。

それにしても別紙では駄目だったのかと思われても仕方ありません。「葉」ヨウは紙を数える単位でしたが、「頁」もヨウと読み、中国語では、ほぼ同じ発音であったことから、その意が頁に転じて同意になったとか(注4)。要するにヨウは頁と重なりますから、全体計画の2頁以下が別葉。全体計画は目次のようなものでその下に何頁も続くということです。

(2) 学校教育全体の道徳教育と道徳科

(1)で述べたように前指導要領で初めて道徳の時間が学校教育全体の道徳教育の要として位置

第6章 組織的・計画的・継続的な道徳指導

=道徳教育にかかる諸計画の立案、活用について研修します

付きましたが、そもそもが、戦後の道徳教育は、全面主義道徳教育を基本として実施され、その後、道徳の時間は、それらを補充・深化・統合する時間、つまりは実質「要」として展開されてきたはずですが（注5）が、それが機能しない状態がずっと続いてきたのです。

道徳の時間が要ということは、本体としての道徳教育がなければ、道徳の時間そのものがないということを意味しています。実際の扇の「要」を見れば瞭然とします。（前回参照）

前指導要領で、画期的だったのは、総則はもとよりすべての教科等の解説で、各教科等における道徳教育の特質が記述されたことです。学校教育全体での道徳教育は、学級経営や学校行事だけ、あるいは指導面だけで実施するのではなく、内容面においても、理科における「生命の尊重」が象徴するように各教科等の特質において、また、内容等の関連において道徳教育が実施されるようになりました。そうでなければ道徳の時間は「要」にはなりえないからです。

小学校理科解説 P93

目標を「自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
 (1) 自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
 (2) 観察、実験などを行い、問題解決の力を養う。
 (3) 自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養う。

科学的体験
道徳的体験

栽培や飼育などの体験活動を通して自然を愛する心情を育てることは、生命を尊重し、自然環境の保全に寄与する態度の育成につながる

D 生命の尊さ、自然愛護

見通しをもって観察、実験を行うことや、問題解決の力を育てることは、道徳的判断力や真理を大切にしようとする態度の育成にも資する

A 真理の探究、創造

学校教育全体の道徳教育

理科 ↓
↑ 道徳科

道徳科 内容項目 D 生命の尊さ

小低	小中	小高	中
----	----	----	---

生命が多くの生命のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること

小5理科 内容B 生命・地球 (1)植物の発芽、成長、結実

小理科 新「解説」p66～

ここでは、児童が、発芽、成長及び結実の様子に着目して、それらに関わる条件を制御しながら、植物の育ち方を調べることを通して、植物の発芽、成長及び結実とその条件についての理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主に予想や仮説を基に、解決の方法を発想する力や生命を尊重する態度、主体的に問題解決しようとする態度を育成することがねらいである。

生命尊重の立場から、成長との関係が確認できたところで実験を終了し、花壇などに植え替えるなどして、実験に利用した植物を枯らさないように配慮するようにする。

ここに全体計画の重要性があります。学校は、目指す子ども像の実現をミッションとしています。それを遂行するために、知徳体が構造化されて自校の教育課程が編成され実施されています。道徳教育は、その教育課程を構成する重要な領域です。全体計画は、その実効化をねらって描かれているのです。

(3) 全体計画が実質化されるために

【主として中学校の先生方に】あなたの担当する教科では、どのような内容において、どの内容項目の指導実践をすることになっていきますか。

全体計画が実質化するためには三つの先生方の姿勢を必要としています。一つは、先生方が常に学校全体の教育活動を俯瞰し、今日の道徳指導が学校教育全体の道徳教育のどこに位置しているかを確認して指導に臨むことです。二つは、子供が、学校生活全体で、どのような道徳的価値に遭遇し、道徳科における本時の指導内容とどう関係するかを理解しておくことです。三つは、全体計画を把握しつつ子供の道徳的成長を見つめ、全体計画そのものを全教職員で充実改善していく姿勢をもつことです。全体計画への参画です。

カリキュラムをマネジメントする

学校組織の特徴のひとつは、各教員の教室における裁量権の大きさである。

教室の実践と学校経営の乖離

カリキュラム・マネジメントはカリキュラムを有効に動かすことにより、学校経営と教室の実践を媒介し、学校改善を実質化する役割を担っている

カリキュラム・マネジメント論では、システム思考で学校をとらえる。システムとは、「目的」「要素」「つながり」から構成される。

常に「何のために」と問い、「目的」と「手段」を峻別することである。

岐阜大学教職員大学院准教授 田村知子 教育時評№39 P16～P17

今次指導要領改訂では、道徳科が先行実施したAL、即ち「主体的、対話的で深い学び」とともに「カリキュラム・マネジメント（以下カリマネ）」、この二つが実施上の重要な柱です。

田村は、教室の実践と学校経営の乖離を指摘するとともに「カリキュラム・マネジメントは

第6章 組織的・計画的・継続的な道德指導

=道德教育にかかる諸計画の立案、活用について研修します

カリキュラムを有効に動かすことにより、学校経営と教室の実践を媒介し、学校改善を実質化する役割を担っていると述べています(上シート)(注6)。カリキュラムを道德教育全体計画に、教室の実践を道德科授業に、そして学校改善を道德教育の改善と置き換えれば、田村のカリマネ論はそのままに学校教育全体の道德教育の充実論につながります。全体計画は固定的で静的なものではありません。教育課程は指導する側の計画ですけれど、カリキュラムは、子どもの側から見た学習と経験の全体である(注7)

とすれば、目標に基づいて、**全体計画を動的、可変的に扱う必然性が生じてきます**。そういう意味では、全体計画への全教職員による参画及び子供の実態(伸びや成長具合)によって、その見直し改善を図りつつ指導改善に向かうことは、道德教育及び道德科におけるカリマネと言っているものです。計画は実践の指針ですから、その見直し改善は指導の改善でもあるのです。そこに別業が全体計画以下の年間指導計画や学級指導計画、各教科等における道德教育のジョイント役になって生きて働き、全体計画が実質化するのです。

そして、この道德教育全体計画への参画は、道德教育充実改善のフィールドになるという面を有しているのです。

(4) 別業の記載内容と形式、その意義

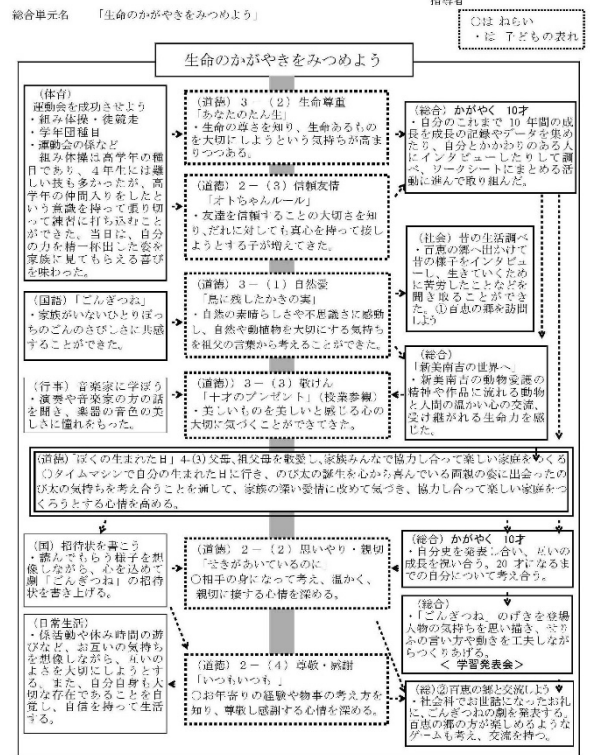
別業の記載事項として、次のようなことが示されています。(注8)

- 各教科等における道德教育に関わる指導の内容及び時期を整理したもの
- 各教科等における道德教育に関わる指導の内容及び時期を整理したもの
- 道德教育に関わる体験活動や実践活動の時期等が一覧できるもの
- 道德教育の推進体制や家庭や地域社会等との連携のための活動等が分かるもの

これらの内容を別業にして加え、全体計画を、年間を通して具体的で活用しやすいものにする事で、全体計画を実効化するのがねらい

ですが、各学校における道德教育の目標、実態を踏まえた重点等が異なれば、全体計画以下の諸計画や指導も異なります。当然、別業も異なります。従って、別業には決まった形式はありません。

第4学年 総合単元構想(2学期)



Uchida は、別業の原型は「総合単元学習」だった(注9)と思っています。この「総合単元学習」は、各学校の重点内容項目を主題化して、各教科等、体験活動等との関連や家庭や地域社会との連携等を図表化して可視化したものです。前述した記載事項が網羅されていることに気づかれるでしょう。

各校の実態に応じた別業 決まった形式はない

次(写真)に挙げる別業は、大規模校で学年が経営母体になっている小学校のもので、学年が母体になっていますから、別業は学年毎の年間指導計画に近いものになっています。

しかしながら、その形より、掲示されている別業に全教職員がそれぞれの実践や評価等を付箋で表したり、他の教育活動との関連を道德的視点で捉えて、気付いたことや改善点を書き込んだりマーカーを入れたりしていることに着目

第6章 組織的・計画的・継続的な道徳指導

=道徳教育にかかる諸計画の立案、活用について研修します

平成29年度 第五小学校道徳教育全体計画別葉(6年) 29.4.11

左縦軸に上から、学年重点、月、ステージ、行事、特別活動、総合、真ん中に道徳、教科と区分されている。

ことで、学年を一つの学習集団とした指導のフィールドを得るといふ、副次的で重要な成果も得、全体計画がPDC Aサイクルに乗ること、ボトムアップによる改善充実も期待できるのです。チーム学校の具体です。

(5)まとめ

例示された「別葉」の記載事項は、頁1枚に収まるとは限りません。各学校の重点を踏まえたとき、その経営戦略と共にどんなことを、どのように別葉にするか等は各校独自でいいのです。要は各校それぞれに全体計画を実効化することで、単なる図表にしないことです。

課題はあります。前回指摘したのと同じ小規模校における取組です。全体計画と別葉は学校独自に意味があるのですから、自校で作成が原則です。これは、小規模校にはきついハードルですが、年間指導計画作成と同様、周辺の小規模校と合作で、まずは原盤を作成し、時間をかけて自校版に改作していくのがいいでしょう。

注・補注

注1 拙稿「別葉」作成のために2018.02

注2 前指導要領 第1章第1の2

2 学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり…

注3 Uchida は実質化ではなく実効化とする。実際に効力を発揮するという意である。

注4 漢字Q&Aに詳述 大漢和辞典を引用

注5 前昭和女子大学大学院押谷由夫教授

戦後の教育改革と道徳教育

2(2)ositani.sakura.ne.jp/worldfiles/ron001.doc

注6 執筆当時岐阜大学教職大学院田村知子准教授「教育時評 No39」学校図書 P16～p17

注7 教育調査研究所「展望1・2月合併号」2015年1月)安彦忠彦

注8 前小指導要領解説道徳編 第2節2 P65

注9 「総合単元的道徳学習論の提唱—構想と展開」(1995.8.1)他 押谷由夫

例示したシートは芝川町立柚野小(現富士宮市立)

注10 全小道研中部地区大会会場校 沼津五小(2017.11.1)

すべきです。こうすることで、①教職員が計画的、組織的、継続的な道徳教育を推進する一人になり、②作成した計画が計画で終わらず改善充実のPDC Aサイクルに乗り、③学校の教育活動が道徳を軸に横断的、縦断的につながれて、学校の教育課程が目標実現のための計画として機能するようになるからです。

繰り返しますが、注目すべきは、付箋であり矢印、マーカーです。しかも、同校はそれを職員室前の廊下に掲示し教職員がいつでも見て書き込めるようにしていたのです。

(5) チーム学校を可能にする別葉

上記の実践校は、小学校のしかも研究校の事例(注10)ですが、学年が経営母体になっている中学校においては、各学級、各教科における指導や実践を可視化して統合するという意味で、「別葉」は小学校にもまして重要です。(2)で述べたように、例えば、「D 生命の尊さ」と中学校理科における「生命の連続性」「自然環境の保全に寄与する態度」の関係のように、「道徳科と各教科等との関連が一目でわかる」ようにもなりますし、「全教職員で共通理解」できるようになることもあります。各教科等を指導しているのは各教科担任ですから、別葉に「参加」することで、教師が教科を超えて生徒を理解する目を獲得でき、学年が一体となった指導が可能にもなります。そして、そうする